校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第40号

令和４年５月１９日

絆

○猿は文化的か？

「多文化共生」、「多様性」･･･今私たちが生きている「社会」で大切な考えであることは言うまでもありません。例えば「多様性」という言葉を耳にする時、LGBTQ+や障がいがある人などマイノリティに関することが話題になっていることがあります。それは、これまでも社会に存在していたにもかかわらず、社会からの十分な理解を得られず苦しい思いをしてきた人たちに、社会の目が向けられるようになってきたことも言えます。**「一部の人を閉め出す社会は、もろくて弱い社会である。」**と、1979 年の国際障害者年行動計画で言っています。多様性には、こうした面と、価値観や宗教、趣味や食文化、言語やコミュニケーション･関係性の取り方など生活様式等に関わる面があります。前者の問題は、教育はもちろん権利保護や法律等も解決に向けた手段の一つとなりますが、後者におけるすれ違いや争い、誤解･偏見等は、人間性の育成や他文化理解など教育に係る比重が大きいと思っています。

人間は、歴史や地域、文化によって異なった社会をつくります。一方、猿はいつでもどこでもほぼ同じです。人間は、複雑なことや現実の出来事を、記号化するなどして共通のものとし認識することできます。例えば炎を見て漢字で「火」と記号化･言語化することができます。だから会話が成り立ち、コミュニケーションが活発化し、お互いの理解も深まります。

極端な例えですが、魚市場などでは専門用語が飛び交い、魚の専門知識のある人が売り買いをします。スーパーなどでは、魚の説明が書かれていることはあっても、店員と客がお互いに専門知識を持って買い物をすることが前提になっていないことが多く、会話は市場ほどありません。コンビニでは、買い回りする際に商品について店員と会話することはほとんどありません。会話が、文化や技術の発達とともに少なくなってきました。私が高校の頃にウォークマンが登場しました。猿がウォークマンを聴くCMが人気でした。今はスマホを高校生ならほとんど持っています。自分だけの音楽･世界に浸れます。昔はTVも家に1台しかなく、子どもも大人の演歌を聴かされました。今は自分の好きな世界に閉じこもることができ、それが他者への理解力やコミュニケーション力の低下につながることがあります。

文化には、一段高いところにあるという意味のハイカルチャーと、生活様式等をさすポップカルチャーとの両方の意味があります。前者は「文化人」、後者は「食文化」という例が適当でしょうか。

芸術に例えると、文化は共通の記号で書かれた台本（シナリオ）、社会はそれをもとにした演劇、人間はその演技者とも言えます。社会では、それぞれが思い思いの演技者になることは、台本がある以上制約が発生し、それぞれに社会から役割が与えられることがあります。「○○らしく」という言葉で、あいまないで異質な役割を与えられることもあります。例えば「女らしくしなさい」･･･それは抽象的であり、個々で受け止め方も違ってきます。演歌などで女性は花によく例えられます。それは、動かない、つまり受動的な存在の裏返しとも言えます。大枠のイメージ･役割があるから余計に苦しくなります。そうした社会的･文化的につくられた性の役割を打破するのがジェンダーの考えです。

猿と違って、人間はコミュニケーションができ、文化を持ちます。しかし、多文化共生社会でなく、多様性が認められない社会だと、共通化が行き過ぎ囲い込み的になり、差別や戦争などがおこります。

明治維新期に隠岐で島民革命（隠岐騒動）がありました。そこから見えるのは、隠岐の人が人情を大事にし、異質なものを受け入れ、共に生きていこうとする精神です。流人を受け入れてきた隠岐。逃げ場のない島だからこそ、対立ではなく、対話を重ね、意見が違っても認め合い助け合っていこうとする精神が、隠岐騒動を収束させた要因です。差別や偏見、戦争の抑止力は、このような精神、コミュニケーション力、他者のことを理解する力、気遣いです。小さな気遣いを積み重ねていきましょう。